

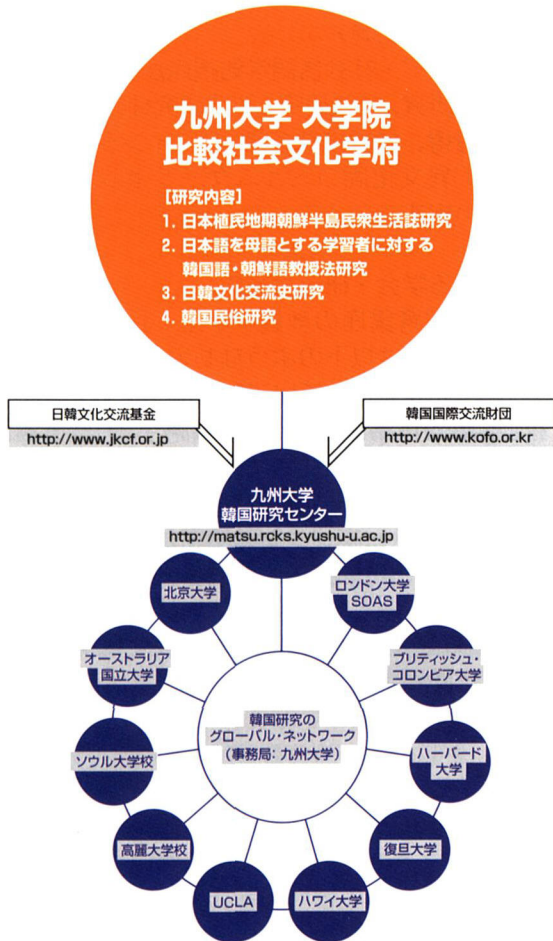
2007年度大学院案内

<https://hdl.handle.net/2324/19457>

出版情報：九州大学大学院比較社会文化学府大学院案内。2007年度，2007-06-01。九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

世界の「韓国研究」へ

韓国研究への誘い



九州大学大学院には、人文科学府・人間環境学府・経済学府や法学府などでも朝鮮研究の優れた研究成果が生まれていますが、我が国際文化専攻国際言語文化講座アジア言語文化コースでは、2002年度に開設された九州大学韓国研究センターと有機的な連携体制を取りながら、韓国学の次世代研究者の養成に努めています。さらに2005年度には、九州大学韓国研究センターが事務局となって、UCLA やソウル大学校など世界の12大学で構成された韓国研究コンソーシアムが締結されましたので、今後は世界の韓国学の碩学が講師を務める大学院生対象国際ワークショップなどを通して、次世代研究者養成プログラムが実施されます。したがって九州大学大学院に在籍することで、世界の主要大学韓国研究者との間で学術研究の輪が広がるはずですよ。

【連絡先】

松原孝俊

koreauok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

<http://matsu.rcks.kyushu-u.ac.jp/>

1	韓国国際交流財団大学院生対象奨学金の受給者数	1999年度から2003年度の5年間：毎年8名ずつ 2005年度：5名（博士課程：1万ドル、修士課程：7000ドル）
2	韓国への留学数	2002年度：1名／2003年度：1名／2004年度：2名



文化人類学を学びたい、あなたに！

担当教員：太田好信、古谷嘉章

I

文化人類学には興味はあるけれども、その内容がよく分からず、躊躇している方々、わたしたち教員も、「文化人類学とはどのような学問ですか」と問われて、返答に窮したという経験は数多くあります。その歴史を説明すれば、十分だろうか。その方法論を述べるのが先だろうか。そもそも、この問いへの答えは、人類学者たちの数だけ多様なのだろうか。けれども、いっけん本質を突くかのようなこの疑問は、この学問の性質とは相反するため、答えようのない問いなのかもしれません。興味のある方は本学府ならびに、九州大学の他学府の教員が執筆に加わった『メイキング文化人類学』（世界思想社、2005）をご覧ください。解答への手がかりくらいは、発見できるはずですよ。

さて、本学府における文化人類学教育の特徴は、「文化人類学とは何か」という根源的疑問について考えることを忘れずに、この学問の歴史を学び、それを継承し実践するということです。歴史が重要なのは、知識生産のための方法論しか問題にされなくなる現在、学問のルーティン化に抵抗するためです。たとえば、異文化理解としての人類学、フィールドワークの学問としての人類学、周縁化されてきた民族を援助するための基礎知識を提供する人類学、というこの学問に対する一連のイメージ群があります。本学府の文化人類学教育の目標に照らし合わせると、それらのうちひとつだけ正しいものを選択するのではなく、それらが生まれ流通し始めた時代における可能性を現在に生かすためには、それぞれのイメージをどう再解釈する必要があるのか、を再帰的に考察することになります。このような再帰的考察を、個人の研究プロジェクトに組み込むということです。

文化人類学のイメージが多様なため、つかみどころのない学問という印象を与えるのは、その対象テーマの多様さにひとつ原因があるのかもしれませんが。タイ北部地域の霊媒たちの活動、フィリピン労働者の世界規模での移動、ルワンダ難民たちの歴史、宝塚歌劇団とジェンダー・イデオロギー、先住民の活動と環境保全運動の関係など。論理的には、ここでそれらをすべてまとめているのが、文化人類学の本質であり、それを知れば、上の疑問には答えることができるはずですよ。けれども、いまだにそれに成功したという文化人類学者はいないようです。そもそも、本質は変化するものです。

とらえどころのない本質をもつ学問ですから、境界は異物を排斥するためにあるのではなく、境界は越境するためにあります。文化人類学は、異なった学問領域の歴史や問題系を尊重すると同時に、それらと対話しようとする姿勢を保持しています。（簡単にいえば、この学問は学際的なのです。これは論理矛盾ではありません。）

これまでのバックグラウンドが文化人類学ではなくとも、広く人文系学問の素養——たとえば、哲学、文学理論、社会学やカルチュラル・スタディーズ、言語学、歴史学など——があれば、この学問への扉は開かれているのです。

それでは、具体的に文化人類学教育のカリキュラムを紹介いたします。文化人類学を学ぶ院生は、かならず「文化人類学総合演習」を履修します。通年で6冊の（「古典」といわれている）民族誌を読み、教員全員と博士課程の院生一名を加えゼミ形式の討論

をおこないます。本学府の文化人類学教育では、最近の研究動向だけではなく、文化人類学の基礎知識もしっかり習得することも目標です。次に、各教員の担当する演習を履修します。ここで、最近の研究動向が紹介されることになります。文化人類学以外の領域へと積極的に越境するテーマが選択されます。たとえば、先住民運動と国際法、30年代米国社会と民族誌、未開芸術と博物館展示、グローバル経済と文化のローカル現象などです。（各演習のシラバスは、比較社会文化研究院のHPにて掲載中です。）

修士課程や博士課程の院生たちは、文化人類学以外にも、社会学、歴史学、思想史などの演習にも参加し、自らの研究テーマに生かしています。また、九州大学の人間環境学府（箱崎地区）にて開講されている関一敏教授、浜本満教授、坂元一光教授などの演習を履修することもできます。

現在、修士課程と博士課程に合計21名の学生が在籍しています。なかには、フルブライト奨学金を獲得し、米国黒人たちの料理本と文化の継承についてフィールド調査中の院生、日本科学協会から助成を受け、モンゴルで伝統文化の再創造をフィールド調査中の院生、メキシコ政府奨学金を受給し、メキシコのペンテコステ派キリスト教徒の改宗について研究している院生、ミシガン大学交換留学生制度を利用し、 minstrel・ショウの歴史について学んでいる院生もいます。

本学府は94年に創設されました。人類学は他の学問領域とは異なり、従来の書斎や古文書館での研究だけではなく、現地語の習得を前提としたフィールド調査が重要な位置を占めてきました。そのため、博士課程を修了するまでに、大学院修士課程入学から数えて10年くらいはかかります。本学府では、これまで2名が博士号を取得しており、現在数名が博士論文を執筆中です。博士号取得者あるいは博士課程満期退学者のうち2名は、研究者として（旧国立）大学に就職をしています。修士課程を修了した院生は、ほぼ100%就職しています。

これまで本学府で学んだ院生たちの多くは、自立した精神をもち、独自の関心を掘り下げる能力をもった人材でした。いまでも、その伝統は生きています。わたしたち教員は、既存のパラダイムのなかに閉じこもり、パズルを解くこと——自らはパズルをつくりださずに——だけに関心のある小器用さをもった人ではなく、荒削りでも広い知識と関心を大胆に結びつけ、自らの研究課題を構想できる独創性をもった人を求めています。



アマゾン先住民族カトゥキナの未来を担う子供たち

人文地理学を究める —スキルアップしたい方へ—

1. 比較社会文化学府における人文地理学教育研究

教育・研究機関の教員や研究者、地域政策分野での専門家等の人材育成をめざして、本学府の地域構造講座と基層構造講座の教員により、人文地理学に関する講義や演習が行われています（講義や演習の詳細な内容は次章以降をご覧ください）。どの講義・演習でも大学院生による人文地理学を基礎とする地域構造や地域政策に関する研究や、高等学校教諭教員免許状（地理歴史、公民）の取得等を支援する教育体制をととのえています。地域構造と地域政策に関しては本学府の教員を中心として、ミネルヴァ書房から本年（2006年）『地域の構造と地域の政策』が出版されましたので、そちらもご参照ください。

本大学院設置以降、人文地理学（含む社会開発論）を主な専攻として本学府の博士後期課程・同修士課程を修了した大学院生は、国内外の大学、中等教育機関、国際機関、行政機関、シンクタンク等に就職し、人文地理学の知識や研究成果を活かして、各分野で活躍しています。

2. 人文地理学関係の教員紹介

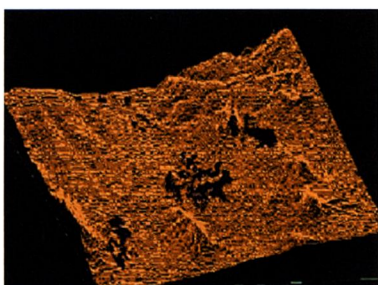
以下では人文地理学関係の2名の教員を紹介します。

山下潤准教授：専門である都市地理学を基礎とし、都市の環境や厚生を対象として、地域構造の視点から各種の地域政策・計画の実態をGIS等を用いて把握するとともに、それらの課題についての研究を深めています。近年は緑地の減少や地球温暖化と都市構造との関係やこれらの環境問題に対処するための地域計画に関する研究をすすめています。

佐藤廉也准教授：文化地理学を専門とし、人類史的な視野から様々な文化における人間行動を研究しています。現在は特に、焼畑移動農耕、山地農耕、狩猟・採集活動など、かつての人類が主要な生業としていた活動を対象とし、環境利用の実態とその人類史的な意味を説明することを課題としています（右図参照）。主にアフリカと中国でフィールド研究をおこない、「森林移動



農耕社会の集落動態」、「移動農耕社会の出生・死亡動態と定住化による人口転換」、「森林・サバンナの動態と人間活動の影響」、「中国黄土高原における退耕還林政策と土地利用変化」などの研究プロジェクトをすすめています（本頁、右図参照）。



1999年

3. 講義・演習の内容

平成19年度では、人文地理学と関連した以下のような講義・演習を開講し、大学院生の研究を支援しています。

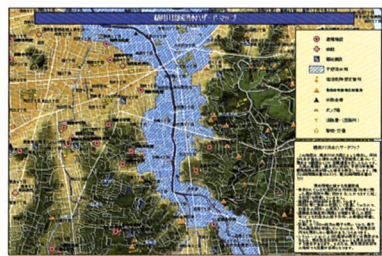
①講義

山下：「都市政策論」を担当。都市における持続可能性という視点から、18年度の *Environmental Land Use Planning and Management* に引き続き、大学院生の皆さんと関連文献を輪読し、環境に配慮した地域政策・計画への理解を深めています。

佐藤：「環境と人類」を担当。文化生態学、行動生態学、生態人類学を中心とする諸分野の文献を題材として、人間社会の動態を環境適応との関係において把握することをめざしています。

②調査研究方法論

技術資格取得を視野に入れ、GIS（地理情報システム）の理論と技術の習得をめざし、実習を中心として講義を進めています。修得された技術は博士論文や修士論文等で活用されています（右図参照）。



③演習

各回のゼミ担当者による発表とゼミ参加者・教員との討議等を通じて、修士論文、博士論文、投稿論文等の完成度を高めるよう努めています。

これ以外に平成19年10月から、学府地域構造講座に産業地域政策論担当の教員が着任する予定です。着任予定の教員は、主に中国東北地方を対象に、国有企業改革に伴う産業構造の変化や人口移動等を研究しており、東北地方の地域経済の再活性化に向けた取り組みについて授業を行う予定です。

このように、人文地理学分野の幅広い視点から大学院生の研究に助言をあたえることができます。

4. 他の研究院・学外との教育・研究連携

これまで述べた活動が主に本学府内での活動ですが、本学府の人文地理学グループは、学内外の人文地理学関係機関との連携も深めています。たとえば人文科学研究院歴史学部門地理学講座と連携し、18年度から全学教育「人文地理学」を、また19年度から比較社会文化学府と人文科学府を横断する総合演習「空間領域ゼミ」を担当しています。くわえて人文科学研究院等の教員とともに全国学会である人文地理学会を17年度に六本松地区で開催する一方で、福岡教育大学等の教員とともに福岡地理学会を運営し、年2回の発表会を実施しています（人文地理学会の開催に関しましては比文広報誌「Crossover」19号をご参照ください）。さらに国外機関との交流に関しては、平成15年以降、忠南大学校と地域政策に関する共同セミナーを開催し、福岡地理学会と同様に、本学府の大学院生が活発に研究成果を発表しています。

【お問い合わせ】山下、佐藤までご連絡下さい。

たとえば「漫画」を研究したい人に

新しい研究を望む人、従来に無い研究を始めたい人、そういう人に、この大学院は研究の場を提供できます。

例えば、「漫画」は、まだ社会的には、学問として認知されたわけではありません。しかし、そんなこととは無関係に日本の漫画は、出版界における規模、経済効果、社会的影響力等、すでに無視することのできない大きな存在となっています。また、アニメ映画ともども、海外でも高い評価を受けており、日本文化としては例外的な輸出超過分野となっています。

それなのに肝心の日本で、本格的な研究がまだまだというのは寂しいかぎりです。誰か意欲的な学生で、真剣に研究してみたいという人はいないのでしょうか。そういう人にこの大学院は、研究の場を提供することができます。

指導教員団には、どの分野の先生を選んでもけっこうです。何故なら、社会学、文学、言語学、作家と作品論など、自分が何を研究したいか、その研究テーマによって、組み合わせが変わってくるからです。

いま、我々の取り組んでいる内容は次のようなものです。

阿尾安泰

漫画には漫画の「語り方」があります。それがあつために、ごく「自然」に読まれています。その枠組みがどのような文化的条件の規定を受けているのか、いかなる権力関係を前提にしているのかなどの問題を考えていきたいと思つます。

松村瑞子

漫画に見られる現代日本語における言語とジェンダーの関わりについて（例えば男女の丁寧さのストラテジーの相違など）社会言語学的に考えていきたいと思つます。

因 京子

漫画は日本語の話しことばの宝庫です。具体的な場面と共に言葉が呈示され、時には登場人物の心のつぶやきと実際に口にした言葉とが二本立てで出てくることもある。しかも、漢字にはルビがついている… これを日本語教育に利用しない手はありません。漫画を、文化や社会に関する情報を豊かに含んだ総合的教材として利用する方法を考えたいと思つます。

杉山あかし

コミックマーケット66ではコミックマーケット準備会と共催でコミケ30周年記念アンケート調査を実施しました。サークル参加者37,620名、一般参加者1,482名、スタッフ参加者336名という、この種の調査で今まであり得なかった規模で（というか、文化研究分野全体でも空前の）ご回答をいただきました。ここに表れた参加者像は……世の「オタク」観のいかに見当外れなことか。

この他にも、たとえば、

- ①漫画を通じて日本文化の特徴をさぐる。
- ②女性漫画からみた男女共生学。
- ③産業としての漫画、アニメ（外国への売り方、等）を考える。
- ④社会学の立場からのアプローチ。
- ⑤アジアにおける日本漫画の受容と影響。
- ⑥文学研究の方法を用いた作家と作品研究。
- ⑦漫画で村おこし等、地域の活性化への利用。

など、いろいろの研究テーマが考えられるでしょう。

勿論、漫画が好き、だけでは研究者にはなれません。幅広い知識を持った、論文を書く能力のある人で、ユニークなアイデアを持つ人を歓迎します。するどい問題意識を持って、境界を超えて勉強できることが、この大学院の特徴の一つなのです。

新しい学問に限らず、従来の学問でも同じ事です。が、教員の指導は最後には関係ありません。論文をあげるのは本人なのです。自分が何をやりたいのか、その目的意識のはっきりした人の中から、新しい時代にふさわしい、新しいテーマの研究者が育つてくることを期待します。

オリジナルな感性を持ち、研究能力があつて意欲のある人、狭い範囲に留らない研究をしたい人……私たちがスタッフは、そういう人を募集いたします。

ロマン主義研究コース

グローバルな研究領域とトータルな視点

担当者：太田（一）、阿尾、嶋田



これまで個別的な狭い領域で扱われてきたロマン主義を新たな形で、総合的に研究していくことを目指す。

A：研究方針

1：空間領域の拡大

ロマン主義を国別で考察するだけでなく、その全体の動きを研究する。各研究者（上記担当教員）たちの連関を図りながら、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツにおけるロマン派の動きを追い、主要ヨーロッパの領域とアメリカの状況の把握に努める。

2：時間領域の拡張

ロマン主義は決して19世紀だけの事象ではない。着実な研究のために、その思潮が準備された16世紀から、その影響が及んでいる現代にまで検討領域を広げる。

3：研究対象の転換

研究対象も従来のように、文学、思想などの領域だけに限定されない。様々な領域の複合的な作用から生み出される文化を研究するために、ロマン主義的感性の生成に関連のある資料を、政治、歴史、社会などの分野からも求める。



B：総合研究テーマ

1：近現代文化論

ロマン主義文化を「知」の問題のひとつと捉え、それを構成する条件を考察する。文学、歴史、思想などの分野の検討にとどまらず、社会科学、文化人類学、精神分析学、医学などの研究動向も踏まえていく。

2：自然表象論

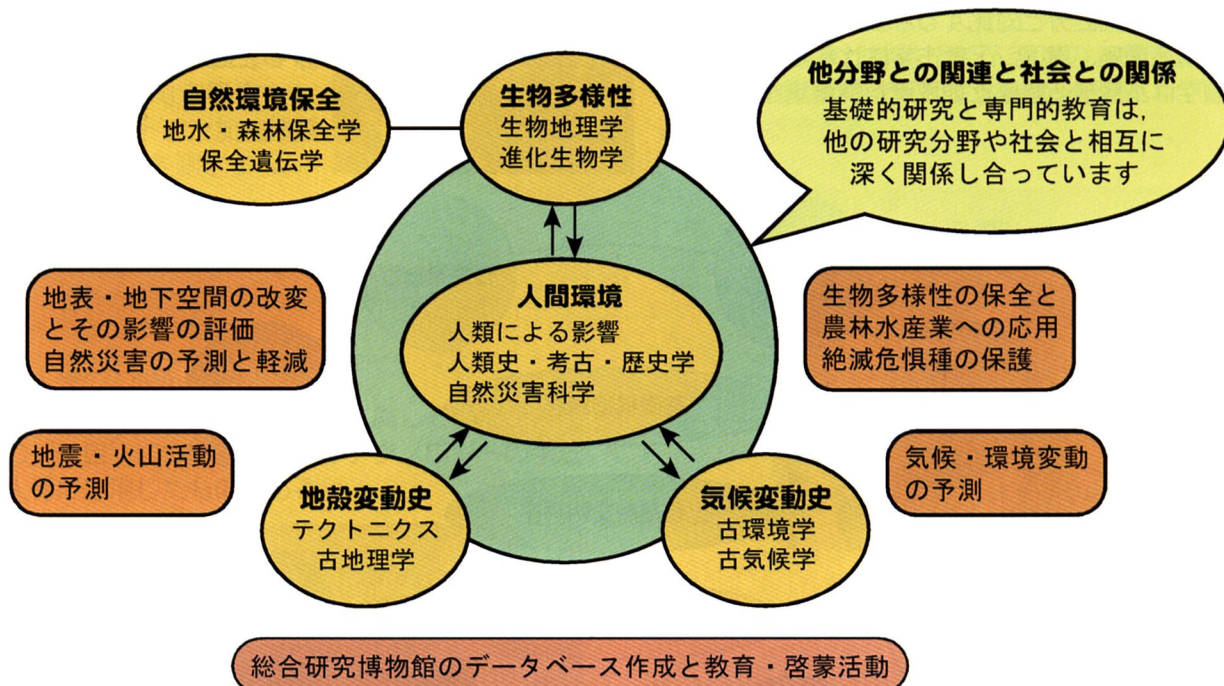
「自然」という表象について考える。自然と文学、自然と人間の関係を研究しながら、そこに新たに「環境」やエコロジー等の視点も導入しながら文化の歴史を読み変えていく。



3：文化空間交流論

大きな活動領域を示してきたロマン主義をトータルな形で考える。様々な諸文化空間の影響関係の問題、そして翻訳などを始めとする文化伝達のメディアの問題を考察する。

比文理系の研究・教育とその展望



<長期ビジョン>
 モンスーンアジアの自然環境の変遷 ⇄ 人類史・歴史とのリンケージの解明
 文理融合型の学際的研究への展開

考古学・人類学メニュー

本学府では、基層構造・比較基層文明・地域資料情報の三講座に所属する考古学・自然人類学専攻の教員が相互に連携しながら、考古学・人類学の研究教育をおこなっている。

基層構造講座は田中良之教授、中橋孝博教授、岩永省三教授、溝口孝司准教授、佐藤廉也准教授の五名で構成される。田中教授は主として縄文土器や他の文化要素を用いた社会動態の研究、及び人骨を用いた原始古代の親族構造・儀礼の研究、中橋教授は日本人起源論をはじめとする形質人類学的研究、岩永教授は弥生時代から古代の社会変動論、溝口准教授は弥生社会論及び理論考古学、佐藤准教授は文化地理学及び生態人類学を専門とする。

比較基層文明講座は、宮本一夫教授と辻田淳一郎講師から成る。宮本教授は中国における新石器時代から国家段階にわたる社会・文化研究を、辻田講師は古墳時代の考古学的研究を専門とする。

地域資料情報講座の小池裕子教授は、安定同位体分析や、脂質分析、DNA解析などの分析諸法を駆使した先史生態学的研究を専門とする。

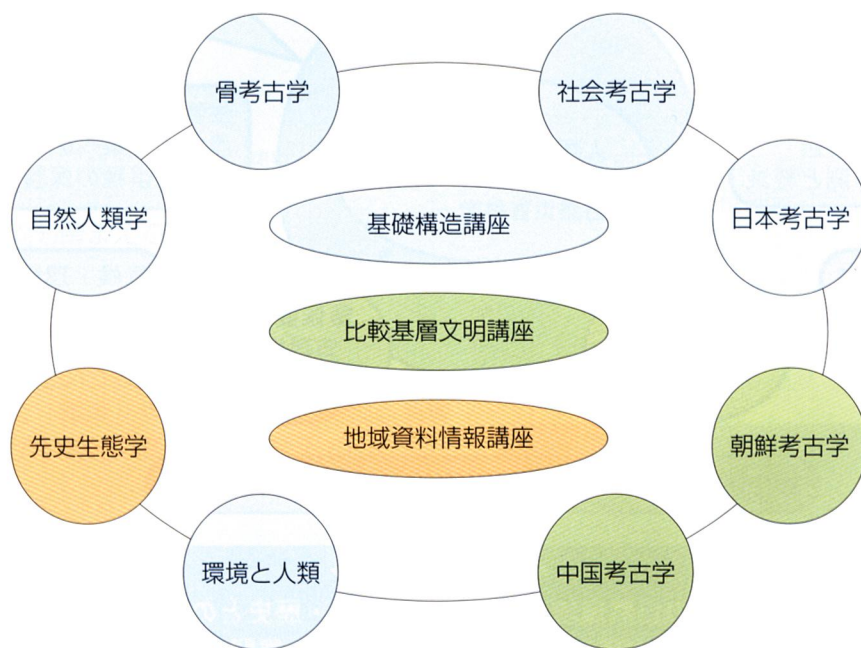
従来の研究区分と対比するならば、日本考古学は基層構造講座、東アジア考古学は比較基層文明講座、人類学は基層構造講座と地域資料情報講座の各教員

によって、それぞれカバーされることとなる。しかし、学際大学院の特質を生かして、これらの諸分野のなかから三名の教員を指導教員として選ぶことにより、これらを柔軟にミックスした研究課題の選定や指導をうけることが可能となる。

院生は、伝統的なテーマの研究はもちろんのこと、学際性に富むテーマへの挑戦もおこなっている。例えばこれまでに、韓国古墳時代の社会構造分析に骨考古学的方法を応用した研究がおこなわれた。また、上にのべた三講座以外の教員を指導教員に加えることによって、近世墓にあらわれた「家」意識に関する修士論文を提出した例もある。指導教員の選択によっては、古人骨の調査法の習得とともに、考古学の先端の理論を学ぶということも可能であり、実際に多くの学生がこのようなメニューを選択している。

このように、本メニューでは、考古学・人類学を柱としながら、伝統的な研究テーマはもちろんのこと、学際的テーマの専攻を可能とする指導体制をとっているのである。

下図にテーマと講座の関係を色わけで示した。学生はここにあげたテーマを柔軟にミックスした研究課題を選定し指導をうけることができる。



1 gの人骨から古代人の生活を探る



日本社会文化専攻の地域資料情報講座は、骨格標本や剥製標本など様々な‘Materials 資料’から、最新の分析手法を用いて食性や遺伝的背景など必要な‘情報’を取り出すことをめざしている。

1 人骨の年代測定

人骨がいつの頃の時代に属する“年代”測定の方法として、加速機質量分析機を用いる高精度年代測定が注目されている。極微量な人骨試料から抽出されたコラーゲン蛋白を、写真の真空ライン精製装置を用いて CC_2 ガスにし、名古屋大学年代測定研究センターのタンデトロン加速機質量分析機で ^{14}C を測定する。



2 人骨を用いた食性分析

古代の採集狩猟民や初期農耕民が何を食べたか“食性”分析法として、人骨コラーゲン蛋白を用いたアイソトープが有効である。写真のANCA-mass（全自動炭素窒素安定同位体質量分析機）は正確迅速に測定ができる。



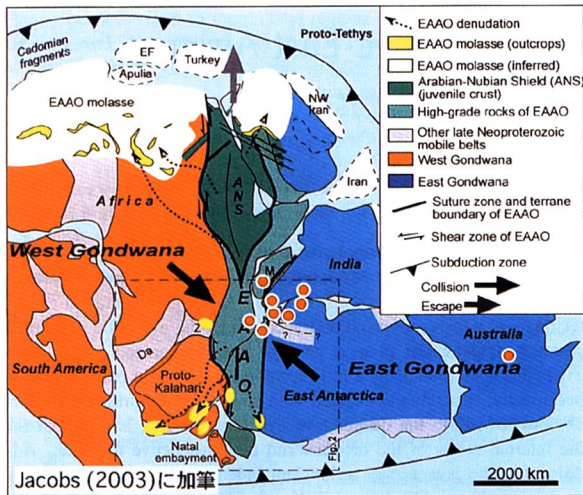
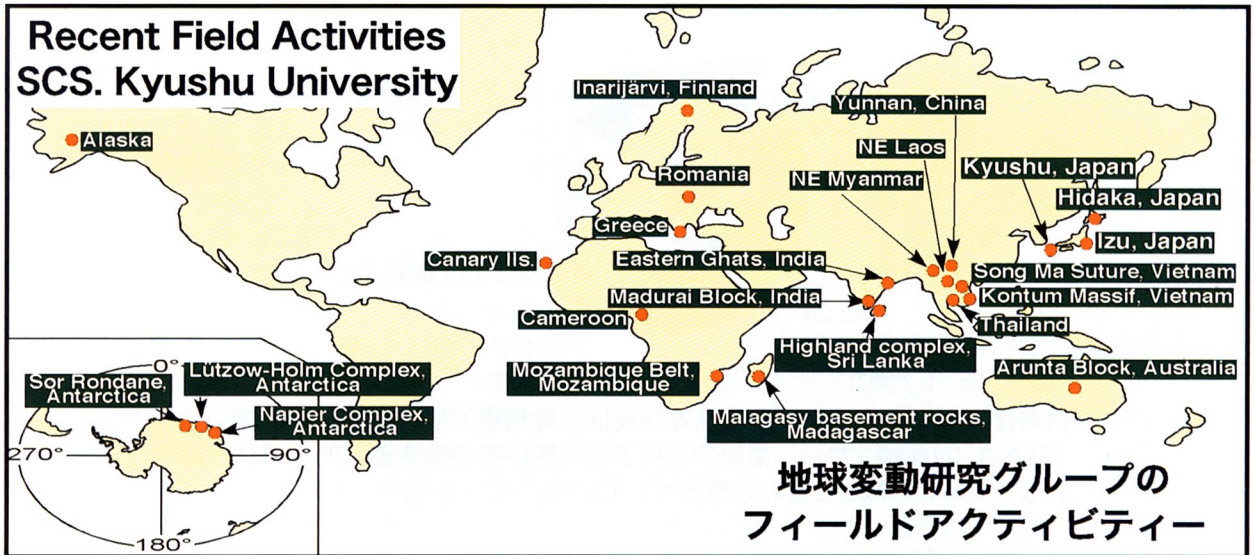
3 人骨のDNA分析

埋葬人骨がどういう民族集団に属していたか古代人の“出自”について、バイオテクノロジーの手法を人骨に応用したものである。



地球創生期から現在まで

フィールドワークから地球変動現象を探る



復元された Gondwana 超大陸における地球変動グループの調査地域 (赤丸) 現在は環インド洋に広がる調査地域も、Gondwana 超大陸の時代には超大陸中央部に集中していたことがわかる

本研究グループで進行中の主な研究課題

- ◆ 極東ユーラシア (アジア) の大陸地殻形成過程
- ◆ Gondwana・ロディニア超大陸の形成・分裂過程
- ◆ 国内各地の変成帯の総合解析
- ◆ 極限変成作用の精密解析
- ◆ 東アジアの第四紀競争的マグマ活動
- ◆ 地中海地域のサブダクションに関するマグマ活動
- ◆ 大西洋地域火山体の地球物理学的観測
- ◆ 伊豆半島東方沖地震の地球科学
- ◆ 地球創生期の始原的大陸地殻形成機構
- ◆ 南極地球科学の総合解析

地域資料情報講座: 小山内康人 教授
 地球自然環境講座: 北 逸郎 教授
 " : 大野正夫 准教授
 " : 中野伸彦 准助教
 極域地圏環境講座: 本吉洋一 教授 (客員)
 " : 白石和行 教授 (客員)

URL: <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/>

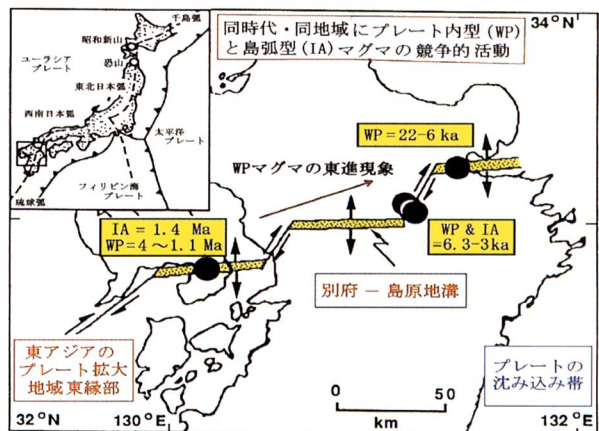
地球変動研究グループでは、地質学、岩石学、地球化学、地球物理学の様々な手法を駆使して、40億年を超える地球創生期の大陸形成から現在の活発なマグマ活動にいたる全地球史的な地球変動現象を研究対象とし、熱帯ジャングルから極域までの汎地球規模でフィールドワークを展開している。得られた試料は、精密かつ最新の分析・実験システムで解析を行っている。大学院生も、国内はもとより世界各地で意欲的にフィールドワークを実施し、科学を推進する上で重要な“発見”する醍醐味を体験している。国立極地研究所・地圏研究グループとの連携大学院講座も予定されており、今後は本学大学院学生として、南極・北極の調査観測に参加することも想定される。



東南極・太古代ナビア岩体の調査



噴火直後の雲仙火山を調査する



東アジアのプレート拡大地域とフィリピン海プレートの沈み込み帯の境界領域に位置する別府-島原地溝帯のオープニングとその中の異なるマグマの同地域・同時代の競争的活動

モンスーンアジアの地球環境変動研究

アジアの気候システムの中核を成すモンスーンは、ヒマラヤ・チベット山塊の上昇と共に誕生し変動してきたと考えられている。私達の研究グループでは、ヒマラヤ山脈の形成時期と形成プロセス・メカニズムを明らかにすると同時に、モンスーン気候がいつ形成され、どのように変動してきたのかを解明するために、2つの研究プロジェクトを実施している。皆さんも地球科学のフロンティアを開拓する私達のプロジェクトに参加しませんか？



モンスーンアジアの起源を探る ヒマラヤ山脈の上昇とモンスーン変動



<変成岩ナップ前進プロジェクト>

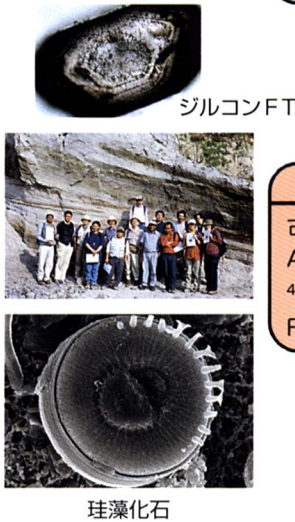
ヒマラヤ山脈の上昇のダイナミクスを
変成岩ナップの前進・冷却史から解く

<古カトマンズ湖掘削プロジェクト>

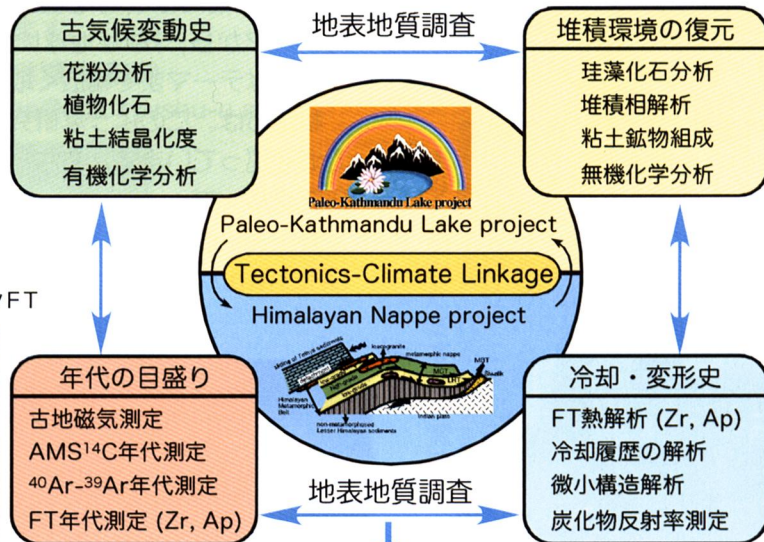
過去200万年のインドモンスーンの
変遷史を微化石と粘土から解明する



<プロジェクトチームの編成>

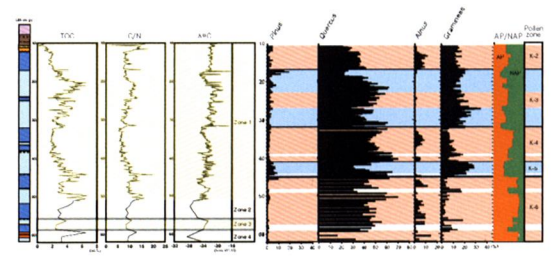
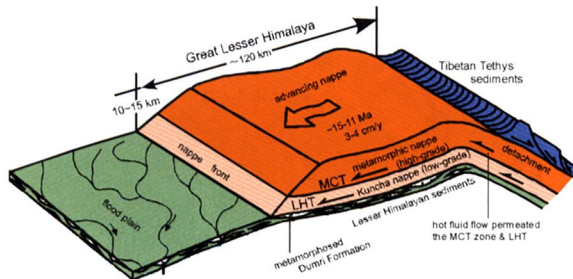


珪藻化石



花粉化石 植物化石

今後の研究展開
東アジアのテクトニクスと古気候変動
インド洋・南シナ海の深海掘削 (IODP)



ヒマラヤ山脈は1400万年前には誕生していた！ 12.5～1.2万年前の古気候変動の復元

研究グループ構成メンバー：酒井治孝（代表）、大野正夫、桑原義博、藤井理恵
他 9 つの研究機関との共同研究プロジェクト

ホームページ URL: <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/>

物理・化学の目で地球環境を調べる

教室で学んだ物理学や化学を野外調査に応用して地球環境を調べることができます。気候変動など地球の表面のことはもちろん、地下や地球の周りの宇宙空間も研究の対象です。

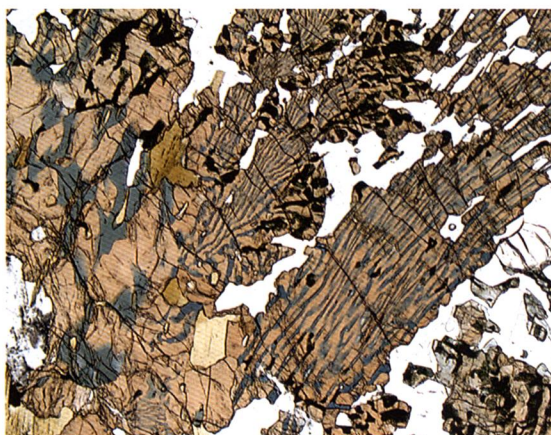
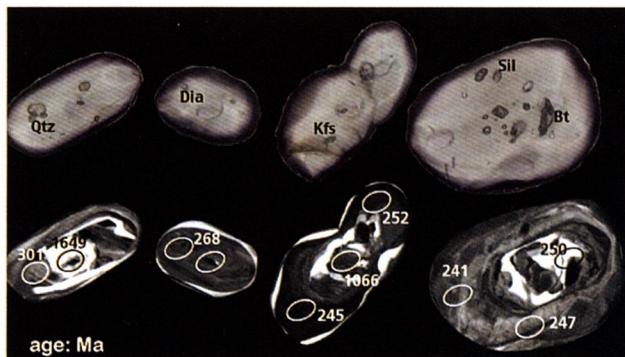
地球自然環境講座では、地震波や電磁波を観測したり、地下から湧き出てくる水やガスの化学分析を行って、地震の発生や火山の噴火の仕組みを研究しています。また、気候変動の復元を目指して、地層中に保存された有機化合物やその安定同位体組成、あるいは、岩石の磁性の分析を行っています。さらに岩石・鉱物の分析によって地殻深部・マンツルの構成物質を明らかにする研究を進めています。



「生命はどんな環境で芽生え進化したのか」といったテーマから、「なぜ地球に磁場があるのか」というようなテーマまで幅広く取り組んでいます。

私たちは、このような研究のため野山を駆け、船で海を巡っています。あなたも参加しませんか？
研究グループ：

大野正夫、北逸郎、小山内康人、野木義史、中野伸彦
URL:<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/>



物質科学研究グループ

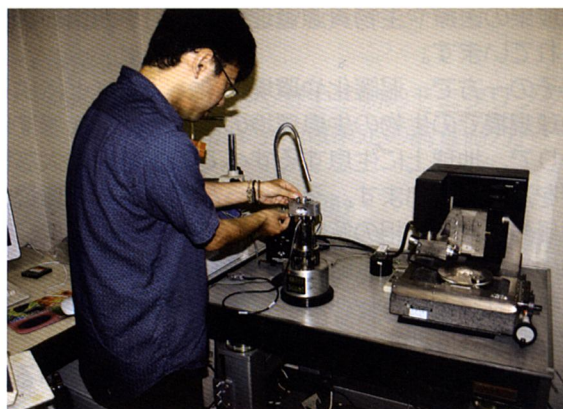
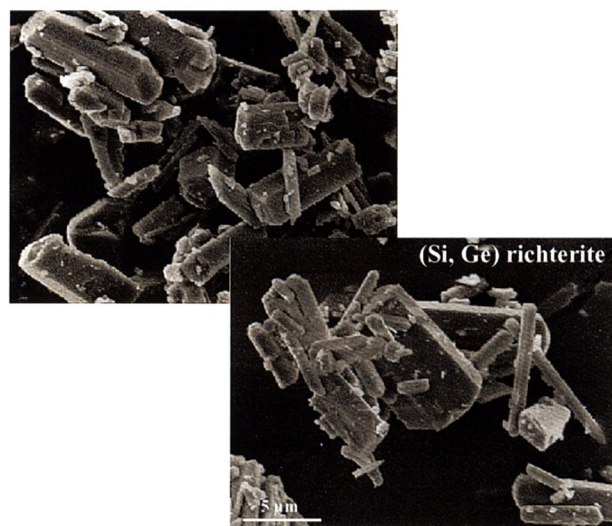
私たちの研究グループでは、地球を構成する基本単位“鉱物”を対象に、X線回折装置、透過型・走査型電子顕微鏡、原子間力顕微鏡、赤外分光などの分析機器を駆使し、また、リートベルト解析、X線プロファイル・フィッティング解析、顕微鏡画像解析などの最新の鉱物学専用プログラムソフトを用いて、日夜、ミクロな世界を探っています。皆さんもミクロな世界の謎の解明に挑戦してみませんか？

主要造岩鉱物および環境指標鉱物の鉱物化学的研究

主要造岩鉱物の角閃石族鉱物と、環境指標鉱物として重要な層状珪酸塩鉱物の結晶化学的研究を行っています。それらの天然での生成条件や変成・変質過程を究明し、地球環境にやさしい産業廃棄物処理法の確立を目指しております。すなわち、様々な化学組成の鉱物を実験室で合成し、共同利用の各種分析機器、すなわち超高压電子顕微鏡室の各種透過型電子顕微鏡(EDS, EELSを含む)、中央分析センターの赤外分光分析装置をはじめ熱分析および各種元素分析装置を用いて鉱物化学的検討をおこなっています。

石田清隆 (地球自然環境講座)

E-mail:kiyota@scs.kyushu-u.ac.jp

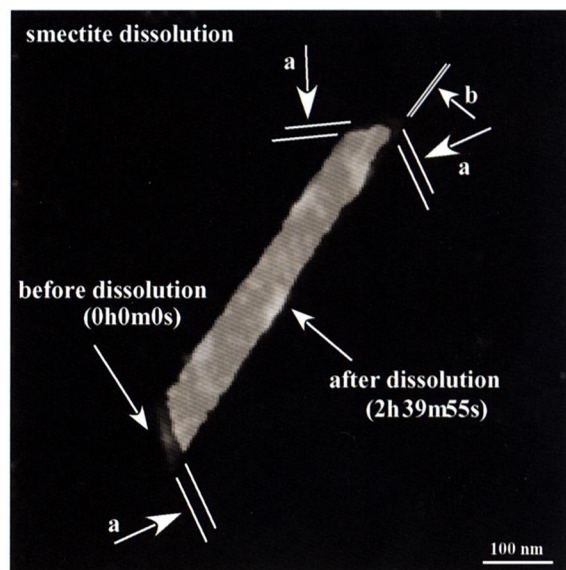


鉱物は地球環境の過去・現在・未来を語る！

鉱物には、地球の過去の気候や環境を復元し、未来の環境を予測するための指標になるものがあります。例えば、イライトと呼ばれる雲母粘土鉱物の結晶化度を精確に求めることにより、そのイライトがもたらされた当時の気候が乾燥であったか湿潤であったかを推定することができます。また、放射性廃棄物地層処理場の緩衝材として期待されているスメクタイトの溶解速度・機構を解明することにより、処理場周辺の環境変化を予測し、長期的な安定性・安全性を評価することができます。皆さんも私たちといっしょに、鉱物を研究することで、過去の地球環境を復元し、未来の地球環境を予測してみませんか？

桑原義博 (地球自然環境講座)

E-mail:yuwa@scs.kyushu-u.ac.jp



自然史研究・生物体系学

生命科学の急速な発展は、ミクロな面での生命現象の解明に大きな役割をはたしてきました。生命現象の研究は今や分子レベルが主流を占めており、研究成果の医療や生物資源管理への応用や利用もはかられています。

その一方で、温暖化や環境汚染、開発などによる地球規模での生物の生息環境の悪化は速度を増すばかりで、地球上に生息するすべての生物に重大な影響を及ぼしています。そのような現在、生物環境の評価や地域生物相の解明とインベントリー作成、生物の行動や生活史戦略、生物多様性と系統進化など、生物を丸ごと個体レベルや群集レベルであつかう学問の必要性は非常に高まっているといえます。それにもかかわらず、そのような研究が行われている研究機関は、日本では少数です。

私たちは、主に昆虫の系統分類学を研究する3名の教員を中心に、昆虫やそれ以外の生物の自然史や系統体系学、分子系統学、行動生態学、環境モニタリングなどを研究する院生たちと一緒に「生物体

系・自然史教室」という研究グループを作っています。研究対象や研究課題によってフィールドもシーズンも違い、研究手法や使用する機器もずいぶん多様ですが、土曜や日曜も、正月にもかならず誰かが出てきて仕事をしている研究室で、日常的な討論と皆が一堂に会してのゼミ、学会の合評会などで相互に批判し啓発しあいながら、研究を進めています。大自然のなかで生物の生活の複雑さを探り、生物多様性を実感したい人はもちろん、生物を丸ごとあつかってその系統分類や生物地理、行動や生態などを研究したいという意欲あふれる人達は大歓迎です。皆さんも、私たちと一緒に研究生活をおくりませんか？

地域資料情報講座：矢田 脩 教授

地球自然環境講座：阿部芳久 教授

荒谷邦雄 准教授

ホームページ

<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/%7eshima/home.htm>



私たちの研究グループで現在進行中の主な研究課題

チョウ類の自然史および系統進化
タマバチ上科の系統分類と生態
コガネムシ上科の系統進化と生態
ヤドリバエと高等ハエ類の系統分類と生態
チョウ類の保全生物学
熱帯アジア産昆虫類のインベントリー
昆虫のレッドデータブック
外来昆虫の生態とリスク評価・防除

Gondwana起源の陸塊に隔離分布する食材性昆虫類の系統生物地理
 マレーシア・サバ州の腐朽材食性昆虫群集
 アゲハチョウ科(マネシアゲハ類)の系統進化
 シジミチョウ科(ミドリシジミ族など)の分子系統
 タテハチョウ科の系統分類と生物地理
 ノミバエの系統分類
 ショウジョウバエの系統分類

自然保全分野

(Laboratory of Nature Conservation)

日本社会文化専攻の地域資料情報講座は、(財)自然環境研究センター (Japan Wildlife Research Center, JWRC) と連携講座を開設しています。地球規模の自然保全のために、海外での保護地区調査や日本各地の野生生物の調査活動に多くの研究成果を挙げております。

多彩な大学院教育

- ・総合演習：研究計画や論文完成にむけて、複数教員を交えて熱心な質疑応答が行われます。
- ・集中講義：自然保全情報・自然保全政策論・自然保全管理論が、集中講義として行われています。
- ・調査研究方法論：自然保全情報分野のフィールド生態調査の指導(修士学生対象)やアイソトープ分析など化学分析の実習を行い充実を図っています。
- ・東京の自然環境研究センターにおいても論文指導を行うので、首都圏在住のまま学位が取得できる利点があります。

研究テーマ

〈保全生態学関連〉

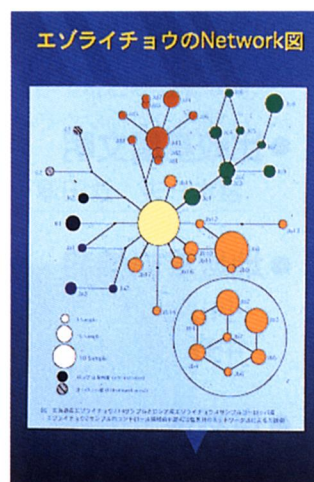
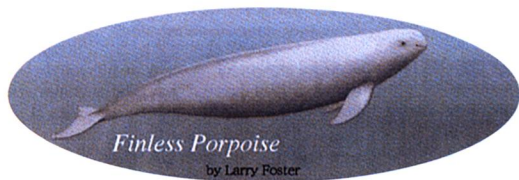
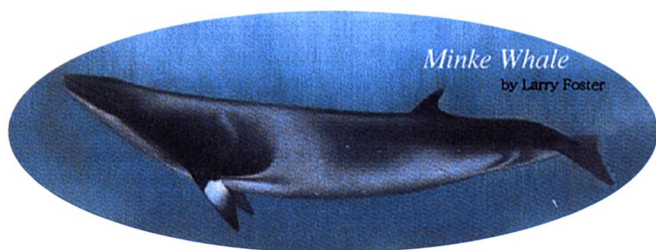
- 「絶滅のおそれのある野生生物のモニタリング」
- 「世界遺産の自然保全地域策定の調査協力」

〈保全遺伝学 (DNA) 関連〉

- 「タイマイ・アフリカゾウなど CITES 関連調査」
- 「ライチョウ・ナベヅルなど希少生物種の調査」
- 「ツキノワグマなど希少生物種の調査」
- 「鯨類の遺伝的多様性の調査」

〈保全栄養学 (アイソトープ) 関連〉

- 「マングローブ林の生物多様性調査」
- 「サンゴ礁の生態特性の調査」
- 「象牙の原産国判別調査」



教員紹介

日本社会文化専攻

- **社会構造** P31
有馬 學 吉岡 斉 吉田昌彦 杉山あかし
直野章子
- **文化構造** P32
清水靖久 松本常彦 西野常夫 波潟 剛
施 光恒 大杉卓三
- **地域構造** P33
高野信治 三隅一百 山下 潤
- **経済構造** P33
関源太郎 北澤 満 堀井伸浩
- **産業資料情報** P34
三輪宗弘 宮地英敏
- **基層構造** P35
田中良之 中橋孝博 岩永省三 溝口孝司
佐藤廉也
- **比較基層文明** P36
宮本一夫 辻田淳一郎
- **地域資料情報** P37
小山内康人 小池裕子 服部英雄 矢田 脩
中野 等 宮崎克則 馬場芳之
- **自然保全情報** P38
米田政明 松島 昇 菰田 誠
- **極域地圏環境** P39
白石和行 本吉洋一 野木義史
- **日本語教育** P39
松村瑞子 山村ひろみ 因 京子 志水俊広
西山 猛 松永典子

国際社会文化専攻

- **アジア社会** P41
森川哲雄 太田好信
- **欧米社会** P41
高田和夫 古谷嘉章 松井康浩 嶋田洋一郎
- **比較文化** P42
高橋憲一 根井 豊 新島龍美 鍋木政彦
- **比較政治** P43
大河原伸夫 岡崎晴輝
- **異文化コミュニケーション** P44
ミヒエル・ヴォルフガング 井上奈良彦
小谷耕二 鈴木敦典
- **国際言語文化** P45
太田一昭 阿尾安泰 松原孝俊 秋吉 収
李 一清
- **地球自然環境** P46
阿部芳久 北 逸郎 酒井治孝 石田清隆
大野正夫 荒谷邦雄 桑原義博 中野伸彦
藤井理恵
- **地球環境保全** P47
矢幡 久 黒澤 靖